

箆笥の一段目を開けると海が広がっていた。静かに引きだしてもどうしても波が立ってしまふ。そこに入るには両腕を耳の脇にのぼして顎を引く姿勢がよい。海には浜がない。海だけを一面に描いた絵画には浜がないのと同じだ。夕食までなにもすることがないので飛び込んでみる。やっぱり浜はなく泳いでも泳いでも波がぶつかってくるばかり。泳ぎ疲れてぼっかり浮かんでいると魚が尻を突いては通り過ぎてゆく。今日のおかずは鰯の煮付けだ。ほのかな土の匂いが好きではない。船がきた。船縁から数組の男とおんなが釣糸を垂れているのが見える。魚を釣ったところで浜のない海ではどこへ帰ろうというのかとふと考える。あの者たちは船の上で生涯を過ごすのではなからうか。ということは箆笥の中で一生を終えるということだ。男とおんなは父母だった。二組の祖父父母だった。四組の曾祖父父母だった。みんなが生とか死ということから解き放たれていた。古い組のほうからつぎつぎと釣り上げられて船上の人となったに違いない。ぼくはひとりであるし、まだまだ生きること執着しているのだから大丈夫

くとも知れぬ妖夢の道行であった……その果てにいかなる個の再生があるのだろうか」と記されている。そんな詩集の最後の作品「桃の核」。

皮は剥がれ  
果肉は無残に垂れ  
手の平に残された核

生まれる前のわたしがいる  
性のみ印され  
なれるわたしが  
なれないわたしが  
光を待っている  
言葉を待っている  
誰も割ってはならぬ

紡錘状の必然  
凹凸に絡んだ偶然の甘さを  
まんべんなく味わうには  
舌で嘗めねばならぬ

陰干しにして  
この世の大気を記憶させよう  
ひと夜枕をともしさめざめ泣こう

だろうとたかをくくっていた。右頬に鋭い痛みが走った。鈎型の針が刺さって船縁まで引き寄せられた。必死に抵抗していると突然波が高くなりあたりが闇に包まれる。誰かが抽斗を閉めたのだ。  
それから食卓に着き 鰯の煮付けのみをほくして真つ暗な口の中で噛み砕く。

頼りとなるべき汀がなくてひとはどう生きていけばいいのだろう。存在と非在、生と死、現実と非現実、あるいは言語と非言語、自意識と無意識、それらを分ける汀をうしなつて、たまたま余儀なくされると、それはそれで愉楽をとまなつて、そういう在り方もまんざらではないとおもってしまうことがある。

もしかしらたら汀を消してしまったのは自分かもしれない。生きていたのも、死んでしまうこともそう大差ないのかもしれない、という誘惑を自分に言いかけすために。たとえそうだったとしても、生きて以上、生と死の汀は必要だろう。それにそういう瞬時の愉楽はだれかの手によって閉ざされてしまうものだ。だれかとは、自分自身でしかないのだが。

平野春子さんの詩集『花の散る里』(洪水企画)は帯に「認知症の夫との最後の数年間は、おどろの闇を歩く、どこにゆきつ

吊るされる経緯と  
落下する事由を  
球形の意味を  
熟していく喜びを疑ってはならぬ

夕映えの床に  
未生のわたしを横たえる  
土をかける  
空がゆっくり閉じられていく

核を割って私が生まれる

再生という幻想をいなくことでぼくたちは、もしかしらたら想像力以上の現実が実現されるかもしれないという幻想をもつのだろうか。

再生前の自分を知っているという現実をいかんともしがたい自分が、再生という幻想にすぎることではか次を生きられないとおもいこむのだろうが、再生というシニフィアンがあたえられるこれがわたしだという主体をどう確保するかが問われているのかもしれないが、存在はつねに他者から与えられるものでしかない。

八木幹夫さんの詩集『郵便局まで』（ミッドナイトプレス）から  
「つくしんぼ」

丘を風のように走りたくて  
何度もころぶ  
おさなごよ  
言葉もほんのカタコト  
しゃべるかどうかだというのに  
世界はすべてきみのものだ

つくしんぼ よもぎ  
ひかる川  
次々と  
山の方からわいてくる  
白い雲

言葉はまだ  
きみの中では  
不定形のままだけれど  
つくしんぼはまるで  
やわらかな小指  
よもぎは  
ようやく生えそろうた髪  
遠くの

村川京子さんの詩集『いつむな、や』（本多企画）から「再生」。

最近  
手で歩くことが増えました  
油を塗らないでね  
ほおっておくと象になります と  
先生がおっしゃる  
（象ならいい）  
いずれにしても  
確実に象になるためには  
床に挨拶をすることが  
つとめだと首をふり 鼻をこすり  
（眼球をずらす）

爪が  
ごつごつと生えてきます  
噛むと さらさらの表皮が  
上下に裂けるのですが  
（渴いていく）

信号のように点滅する夕陽

川は  
ゆっくり動きだす大蛇  
雲は  
つかみとれない綿菓子

そう  
きみには  
昨日や明日という時間がないのだ  
今だけがまっすぐに輝いている  
永遠なんて  
ボーダイなものをまだ知らない

ぼくたちが生きているこの世界はそのむかし、空間も時間もないところからはじまった。その場所では（空間がないからそこは場所と呼べない場所だったのだろう）素粒子たちが生まれては消えしていたが、ある日、なにかのはずみで消えない素粒子があった。そんなふうに、真空といえども無ではいられない世界が最初にあった。だから、おさなごも無ではいられなくなりこの世にニユキッとあらわれたのだ、ないではなくあるという世界を平然と生きているぼくたちへのテーゼとして。

だからおさなごは、生成されていない言葉、意識、肉体をほくらに投げ寄すのだが、きつとほくらの次元が少ないのだから、おさなごの姿を見つけることはかなわない。ほくらはつねに取り残された位置でしか生きられないという虚無感にみだされながら、どうにかこうにか生きている存在である。

目を覚ますと枕が臉の中にあり  
北を向いています  
（裏返しても同じ）

骨が現れます  
ゆっくりゆがんで  
もぞもぞと幻化していきます

（有象無象に）  
転化していきます  
（次へ さらに次へ）

ひとはひとのままで一生を終えるとはいえないこともある。生まれてはみたものの、両の足で歩くという定型の日々のなかでひとという形を過不足なく生きていくと、ひとがひとであることの安心感があつて、容易にその存在を疑おうとはしなくなる。ひとがひとであることはひととして理想の関係だという幻想のもとで生きている。そうはいっても理想は理想である。百年の恋も一瞬に冷めてしまうこともある。

ひととして定住しているひとと足並みを揃えられなくなると、ひと以外の、たとえば象、になったりするのだが、ふつうのひとはそういうことが許せないの、つい知らんふりをしてしまふ。そうなるひとと以外を選んだひとは図に乗って象そのものになりたく努力するのだが、しよせん、ひとはひとでしかない現実をそのうち知ることになるだろう。自分では象だとおもっている他者の目には象とおもっている自分しか映っていない

ことだってある。

渡辺めぐみさんの詩集『昼の岸』(思潮社)から「無季」。

火事を見た  
ひとが死ぬのが怖い  
と思った  
それだけのために  
泣いてもいいはずだ  
もつと もつと  
それから  
あのひとの灰色のコートの背中に隠れ  
世界を覗いた  
二度と火事を見なくてすむように  
あのひとのコートの袖口を眺めても  
顔は決して見ないようにしていた  
あのひとの脳裏の闇が  
晴れても 暮れても  
雨にぬかるんだ売り場に  
雑草のごとく生きてきた  
記憶の生を  
誇りにしよう  
と決めていた  
季節が乱れるたびに

本気にしなければ生きていけない世のなかだから、生きていることは雑草のようにはびこっている。そんな世間だから自分も、とついおもってしまうが、そんなふうには自分をおとしめて生きていくことはできない、とだれかの体温がそう告げている。たとえ、無機質な光景にとりかこまれていたとしても。いや、そうであるからこそ、この世を意味あるものとしてとらえていく気持ちを前のめりにしたい、とつい、おもってしまう。

田中勲さんの詩集『雨は群星の影を逐って』(能登印刷出版部)から「影の群星」一連目と最終連。

そのものの、はじまりが  
不明という献身にゆだねる量子論に  
つきまとう思考の影は  
まるで死と苦悩をあぶりだす  
いたしかたのない世界の習わしとでも云うのなら  
許す許さないという言葉の  
範疇どころではない  
人にはひとつではない無数の心があるからには  
平面の砦を観察する欲びもあつたか  
影の存在を無視した宇宙にある外側の日々新たな推論が

だが、一枚の平面的な影には

胃壁を病んだが  
気にしなかった  
ひとがひとと結び合っているのは  
壊れた時間の贖いだ  
蛆が湧くほど  
寒いこともある  
けれど  
ひとの体温を通してしか  
呼吸できないときもあるのだから  
そのことを幸福と名づけてみたかった日  
行きつけのドラッグストアが  
廃店していた  
夜の高層ビル群は  
灯りだけで輪郭を形成する  
ランドマークタワーの最上部が  
霧に姿を消していた

ひとは生きていると、自分が死ぬ瞬間を見るときがある。死ぬのは怖い。だから、そのことだけに泣くこともある。だから極力死ぬ瞬間は見ないことにしたい。でもなぜひとは自分の死ぬ瞬間を見ってしまうのだろう。  
ひととひとのあいだにねじ込まれた無理数はどうしたらいいのだろう。それは自分のせいのような気がするが、きつとそうではなく、本来的にひととひとのあいだには無理数がまぎれこんでいるのだが、それを、だれも本気にしないで生きている。

たしかに影の  
不都合もあるかもしれない  
光源を浴びるある物体にまつわる  
歴史や時代や空間的な制度に関係なく  
受身的な不安を  
見せつけるにはもってこいかもしれない  
死んだ言葉の影に意味などあるか  
影の大国は遠すぎて  
夜空に描く星座の物語のそれぞれの内面に潜む  
盲目に死の影の本性を宿すも、  
すべての影の影、影の群星であるというも  
己の生命の影の群星は生涯だれにも見えない

ひとは、ほんとうはそれが自分かどうかともわからないのに、自分だとおもっている丸々肥った自分というものに寄生している影でしかない、のかもしれない。  
この世は、受身的な不安、というどうすることもできない構造を強いられている気がする。それならそれでいいのだし、影であることを逆手にとつて、丸々肥った影というイロニーの世界で自分をたたせていくことで、影は影である負い目から開放されるという幸福な瞬間が訪れるかもしれない。ほくたちはそもそも「不明という献身にゆだねる量子論」をおしただい、そこから出発していると信じているのだから。

吉田義昭さんとはもう50年近いお付き合いになる。この歳になるまでそれぞれいろんなことがあったが、とくに吉田さんは奥さんを亡くされた。ともに歩いてきた人を亡くすというとりとめもない空疎さにとりこまれたことだろう、と遠くから心配していたが、趣味のジャズ音楽（彼はジャズ・ボーカリストなのだから）などを介してひとり、ひとりを生き直している。さながら「ああ、吉田さんも生きてるんだ」とほくへの励みにもなっている。

そんな吉田義昭さんの詩集『幸福の速度』（土曜美術社）から「朝食の時間」。なおこの詩集の作品はすべて一連六行、四連構成という形式のもとで書かれている。

目覚めが悪く夜の孤独のまま迎えた暖かな朝

「世界一孤独な日本の老人たち」と噂され

夢の中で激しく自分を叱った私の老人度

世界一になれるなら趣味は人に聞かせる独り言

適度な幸福な孤独は病気の原因になると

私の国では気づかれずに老いていくのは不幸です

朝空を見つめ白いテーブルに腰掛ける独り家族

妻に死なれ急激に心から疲れ切っていた私でも

ゆったりと静かに自分を見つめ直して暮らし

老いる幸福の速度に従い柔らかく生きていただけ

私の孤独が正の孤独か負の孤独か分かりませんが

日々 本当の会話をしていない人の方が孤独です

何を食べるかと一時間もぼんやりしていました  
卵料理が浮かんでもフライパンは汚したくなく  
白内障の手術で卵の殻が破れた生活に迷い込み

「目玉」焼きなんて怖ろしくて食べられません

フランスパンを食べてもフランスはあまりに遠く  
サラダは冷蔵庫から出してはまだ寒がついていました

皆、密かに一人で生まれ「独り」を愛し一人で死ぬ

老いてから「私に恋した私」も「私に涙する私」も

私を虐める「幸福嫌いの私」も隣にいたのに

老人で男やもめで独り暮らしの人間は孤独病

そう簡単に定義する社会の方が私が見捨てたのです

朝食に何を食べようかと悩む男のこの贅沢な時間に

歳がいけば老人センターで百歳健康体操をし、囲碁や将棋と  
いった老人むけの趣味をもち、あってもなくてもいいような会  
話をし、ひとさまに迷惑をかけないようにひっそりと生きてい  
くことが望まれているのだろうか、ぼくはどうもそんなふうな  
歳の老い方をしていなくて、人に言えない欲望や蹉跌をささや  
かに吐き出しながら生きているのだが、吉田さんもきっと「私  
の欲望は私のなかにしかない」とおもって生きているのだろう。  
これからさき何年生きられるかわからないが、「老人を定義す  
る社会」を見捨てて生きていきたい。